

## VI 第10回 鯨に関する座談会

共催 { 鯨類研究所  
水産海洋研究会

主 題 昭和43年度北洋捕鯨の操業結果について  
日 時 昭和43年12月13日(金)13時-17時  
会 場 大洋漁業協会議室

コンピナー 奈須敬二(遠洋水産研究所)

話題および話題提供者

- |                      |                   |
|----------------------|-------------------|
| 1. 操業概要とその結果         | 甲 藤 幸 一(大洋漁業株式会社) |
| "        "           | 安 井 敬 一(極洋捕鯨株式会社) |
| "        "           | 加 藤 英 明(日本水産株式会社) |
| 2. 鯨体生物調査結果について      | 正 木 康 昭(遠洋水産研究所)  |
| 3. 最近における捕鯨漁場とその海洋構造 | 町 田 三 郎(鯨類研究所)    |

### 1 操業概要とその結果(1)

甲 藤 幸 一(大洋漁業株式会社)

今次北鯨は母船第3日新丸、捕鯨船8隻(内1隻は探鯨専門)で抹香鯨2000頭の捕獲枠での出漁であつた。今年は過去の漁場の変遷から漁場の基礎調査の必要性を感じ先航調査船を3隻出し、極洋捕鯨と共同探査した。24日東経沖合漁場(45N. 170E)より操業開始したが、この海域発見多数あるも(2日間で発見約500頭)ほとんどが35ft(10.6~10.8m)位の物で選鯨に非常に苦勞した。5月27日から第1回目の列島沿い操業に入つたが、操業開始前の探鯨ではアムチトカ水道より西経側(東側)では列島の南北共に文字通り発見皆無という報告を受けていた事でもあり、アムチトカ水道以西の列島沿い北側を操業する事となつた。この時期での列島沿いの海況は3~4度台の収れん域で捕獲があつた。船団はそのまま西進してコマンドル諸島南東(54N. 168.30E)迄進出したが、ここは過去の実績より小抹香の捕鯨となるので1日間操業で反転東進、アツツ島の南で小抹香を20頭程たいた後にアガツツ島の南~タホマリーフ~キスカ島の南迄進出するも鯨の姿はまったく見えず、捕鯨船1隻を列島の北側に廻したが、これも同様発見なし。水温は先の西進の時(5月28日~30日)より全体に1度程度上つており、4~5度の対応を見せていた。この間探鯨船がアツツ島より東進、ウマナツク島西側迄探するも発見無し。その

後キスカ島よりアムチカ水道及び水道の南口にかけて4~5度の収れん域で約100頭捕捉するも6月6日に操業海域に鮭鱒船団操業海域の南側、操業開始時の小抹香漁場に南下操業せざるを得なかつた。相変らず屑の様な小抹香があり遅鯨に苦労しながら西経漁場の天候回復待ちをしていた所、13日に至りその徴候見える。海況的には180~170W・45~50N間の範囲で11度台の水温も出現していたが、6~7度台の収れん域で捕獲があつた。この漁場で6月16日~21日(6日間)迄操業したが、さすがに昨年の実績通り鯨体大きく124頭捕獲で平均48ft(14.6m)をあげる事が出来た。低気圧の船団海上接近により、列島向け北西進開始、途中48N・175Wの海域(5日程前には6度位の水温との混合海域で約60頭の捕獲があつた場所)を狙うも、すでに水温平均化し、7度台のノツペリとした場となり楽しみのないものとなつており、漁場変化の速さを感じさせる。6月27日より再び列島北側東進するもキスカ島よりアムチカ島の間1頭の発見もなかつたが、翌28日タナガ水道に於いて大抹香の大群70~80頭発見、捕獲50頭にて制限する。翌日はこの群を西向きに追う予定であつたが、霧の爲反転、東進操業としたが、アムチカ水道迄の列島沿い北側一頭の発見もなかつた。アムチカ水道南下再び西経大抹香漁場に入り7月末迄天候かわしながら操業した。海況は、45N・175W付近は10~11度の対応、43N・165W付近では11~11.5度、12~13度の混合海域で水温変化顕著であつた。昨年、16次に於いても、44~47N・170~173Wの海域で9~11度の顕著な収れん域に沿つて漁場が形成されていた。この28日間で捕獲は537頭、平均45ft(13.8m)の成績を揚げたが、鯨はいずれも大型、下長、コスク、一頭物であり各捕鯨船手こずつていた様である。

7月28日、船団南西から接近した低気圧が急速に発達し、船団付近からプリストル湾に北上した為、今漁期最大の時化となり、好天を追つてアラスカ湾に向けた。ここは昨年の実績により深入りすると(余りカナダよりに入ると)小抹香の捕獲が予想されるので、150W迄の湾の西部に限定して操業した。この海域には14度の暖水が北東より張り出し、その線にそつて中・小抹香の発見、捕獲があつた(15日間366頭捕獲)。8月12日天候くずれ、船団は、2極洋が東経漁場操業時に大抹香の発見があつたのと、復航の関係もあり、西進操業とし、18日捕獲達成した。切揚前の3日間列島沿い操業を行つたが、タナガ水道の南側(水温8~10度)で視界不良の中で一頭物が散見された、又、キスカ島、ブルディア島近で7.5~9度の収れん域があり、大抹香の捕獲があつた。

今次操業を省みるに、従来の抹香漁場の転換期が来ているとの感を強くした。主要漁場であつた列島沿いでの捕獲が、14次には906頭、総捕獲(1640頭)の55.2%、15次は1108頭(2000頭)55.4%であつたものが、16次には641頭、32.1%に落ちている。今次北鯨に於いても列島沿いの捕獲を目指して、船団も数度接近し、又探鯨船を出したが、473頭23.7%に終つている。又、ベーリング海区であるが、この漁場も14次には650頭で全捕獲の39.6%を占める主要漁場であつたが、昨年度は好天の中で再三にわたる調査にもかかわらず発見無く捕獲零、今次もこの海域での捕獲は皆無という状態である。これ等に替わるものとして登場したのが西経側45N線を中心とした沖合漁場及びアラスカ湾漁場である。特に西経側の沖合漁場は昨年初め

て操業した海域であるが、昨年<sup>の</sup>36%に続いて今度も全捕獲<sup>の</sup>30%を占める主要漁場となつており、対称が大抹香である点、生産歩留り向上の面から非常に有望な漁場であり、天候をうまく利用すれば今後も北洋抹香漁場の大きなウエイトを占めるであろう事が予想される。又、アラスカ湾海域であるが(昨年度は全捕獲<sup>の</sup>18.8%、今度は23.6%)、この漁場は鯨体小さく、歩留り低下は懸念されるが、天候かわし等、一時的な漁場転換の場としての利用価値は充分あると思う。尚、今年度はソ連船団との接触はまつたくなく、その影すら見る事が出来なかつた。

質 問

(大村)以前のマッコウクジラと現在で、班紋などのような体色に相違はみられなかつたか。

(甲藤)特に、気付いたことはない。

(加藤)私がみたところでも、特に、差は認められなかつた。

(奈須)45°N付近では、南北で水塊が異なっているが、餌料組成上何か差はみられなかつたか。

また、500頭余り発見した群から捕獲した鯨の性比はどうか。

(甲藤)餌料については手もとに資料がないので分らない。性比は大部分がメスであり、そして約半数が妊娠していた。

操業概要とその結果(2)

安 井 敬 一(極洋捕鯨株式会社)

近年のヒゲ鯨漁場を眺めると、既に、知られているように、12-15次北鯨までは、180°以東の50°N以北、特にアラスカ湾を中心に分布していた。このアラスカ湾における操業は、年々漁場が南偏するとともに、天候および発見状況等により、余り行なわれていないのが実状で1968年度漁期(17次北鯨)は、逆に180°以西で実施された。

近年7-8年における、日本およびソ連による捕獲状況は次の通り。

	ナガスクジラ	イワシクジラ
日本1961(10北)-1968(17北)	8,915	13,641
ソ連1961(10北)-1967(16北)	8,103	5,699
計	17,018	19,340

1) 操業概要

第2極洋丸船団は、5月15日に操業を開始し、8月29日捕獲枠の734BWUを達成したが、その間の操業日数は107日であつた。

操業に先立ち、調査船4隻による調査結果を基にして、45°E、160°E付近より操業を開始した。今漁期も、当初より東経域におけるイワシクジラの発見が連続し、5、6月と高気圧の影響を受けて好天に恵まれ、捕獲、生産ともに順調に進み、操業開始後50日目の7月3日には、シロナガス換算400頭に達した。しかし、日本の2船団による反復操業に起因して、発見鯨も一時減少したため、捕獲枠の多い当船団は、漁場拡大の意味で先航調査を実施しつゝ、7月15日より